

寡聞にして知らなかったが、機密解除された米国公文書の中に「マッカラムメモ」なるものがあるという。

米国海軍諜報部のマッカラム少佐が、ルーズベルト大統領が最も信頼する軍事顧問であったアンダーソン及びノックス両提督に、1940年（昭和15年）10月に提出した「太平洋における情勢予測と米国のとるべき行動」と題するメモのことである。

当メモにおいて、少佐は、欧州戦線及びアジア地区の情勢を分析し、その結果に基づき、米国が採るべき対日行動の指針として、次の8段階（①から⑧）を提言している。

- 『① 英国と、太平洋における英国基地、とりわけシンガポールの使用について協議せよ。
② オランダと、蘭領インドの基地施設使用、物資獲得について協議せよ。
③ 蒋介石の支那政府にすべての可能な支援を与えよ。
④ ひとつの長距離重艦隊を東洋、フィリピン、あるいはシンガポールへ派遣せよ。
⑤ 2つの潜水艦隊を東洋へ派遣せよ。
⑥ 主力艦隊を太平洋ハワイ諸島に維持せよ。
⑦ オランダに、日本の不当な経済要求、とりわけ原油要求には拒否するよう主張すべし。
⑧ 米国は英国との連携のもと、対日貿易を完全にやめる。』

これらの手段により、日本を明白な戦争行為へ導くことが出来れば、それが重大であればあるほどよい。』

欧州戦線の悪化拡大の為に日本と独・伊の連携を阻止することが出来、日本海軍が弱点を呈している時の攻撃が効果的であり、且つ経済封鎖により早急に国家崩壊を強いることが出来るとの狙いである。

今日、歴史を知る者から見れば、ル大統領は、このメモに記載されたプランを全て実行している。

考えるに、当時の日本の政治・軍事指導者が何らの明確な戦略的展望もなく、欧州戦線におけるナチスドイツの快進撃にも幻惑されて、日本は已む無く戦争に突入せざるを得なかったのに引き換え、米国はグランドデザインを描き、それを着実に実行している。歴史的必然を考えれば、日米は何れ衝突する宿命にあったのかもしれない。何れにしる、戦略的思考法の得意・不得意は、日本のような農耕民族と欧米の狩猟民族の差異なのか、或いはもっと根源的な思考法の問題なのだろうか。考えさせられる問題だ。

戦略性といえば、先程、小泉首相が中央アジアカザフスタンを訪問したが、珍しく戦略的な動きをしたものだと驚いている。当面の対応には手練主管を駆使して大成功を収めてきた小泉首相だが、この5年間、日本の向かうべきグランドデザインを提示し、布石を打ってきたとは言い難いのが実態であったから、今回の訪問が意外であった。

閑話休題、先の大戦については、未だにルーズベルト大統領の謀略説が根強く流布されているが、このようなマッカラムメモの存在を知るにつけ、さも有りなんと思わざるを得ない。

さて、日本のミサイル防衛は正に喫緊の課題である。今般、米国の最新鋭イージス巡洋艦「シャイロー」が横須賀に配備（平成18年8月29日）され、青森県車力のXバンドレーダー配備と相俟って格段に向上した。

<シャイロー>

全長127メートル、満載排水量9950トン。弾道ミサイルを捕捉、追尾するイージスシステムを備え、北朝鮮の「ノドン」など中距離弾道ミサイルを撃ち落とす海上配

備型迎撃ミサイル「SM3」の発射能力をもつ。前後の甲板にSM3のほか、巡航ミサイル「トマホーク」などを撃ち出す垂直発射装置を備える。横須賀基地には、同艦のほかに弾道ミサイルを追尾できるイージス艦が七隻ある

SM3は、弾道ミサイルを大気圏外（ミッドコース段階）で迎撃するミサイルである。ターミナル段階はPAC3で対応することとなっている。敵基地攻撃やブースト段階は米国に依存せざるを得ないのだろう。

（参考：渡部亮次郎氏メルマガ「頂門の一針」、ニュース記事等）